

中学校音楽科における伝統音楽の指導に関する研究

—宮城道雄の「童曲」及び教育的意図にもとづく「歌曲」を用いた箏の学習を通して—

大森由紀

(本講座大学院博士課程前期在学)

I はじめに

2002（平成14）年度から中学校では和楽器の学習が義務付けられて、学校現場では和楽器の扱い方や指導方法の研修が重ねられ、授業交流や情報交換が行われて現在に至っている。広島県福山市¹⁾においても、箏の貸し出しとともにゲストティーチャーを迎えた箏の授業が小中学校で行われてきた経緯があり、「さくら」をはじめとする簡単な箏の合奏は広く行われている。しかし、多くの場合は器楽での学習にとどまっており、次への段階を模索している現状がある。そのような中で筆者は、歌を歌うことに着目し、箏を弾きながら歌を歌う活動を展開することにした。

箏を弾きながら歌を歌うという活動は容易ではない。しかし、日本の伝統文化である邦楽において多くのものが歌とともに発達し、我が国独自の音楽を発達させてきた経緯があるが、箏曲に関しても同様であり、地歌という我が国の伝統的な歌唱の文化をもっている。

また、現行学習指導要領では「曲種に応じた発声」²⁾が取り上げられ、全国的には様々な授業展開が工夫されてきたが、扱いにくい内容と捉えている教師も少なくない。地歌箏曲の要素を取り入れた学習は、和楽器の学習と同時に、伝統的な歌唱の学習をすることが可能である。筆者が歌に着目したのもそのような理由からである。

中学校音楽科において、我が国の伝統音楽のよさを味わうことのできる学習展開を考える時、表現及び鑑賞の一連の過程を大切にすることは重要である。限られた時間の中で目標を達成するためには、ねらいを焦点化した指導計画をたてることや、指導過程の工夫が必要である。そこで歌を取り入れた箏の学習を始めるにあたり、①基礎技能の習得→②鑑賞曲の活用→③創作活動→④鑑賞活動→⑤個人の創作活動、という大きな流れを考えた。①は大変重要であり、②-⑤の基盤になっていくものでなければならない。扱う曲は箏曲の簡単な入門曲としてだけでなく、単純な作品の中にも古典の要素が含まれ、構成が象徴的に学習できるものが必要であった。そこで取り上げたのが『宮城道雄小曲集』である。

『宮城道雄小曲集』は、昭和7（1932）年と昭和9（1934）年に発行された、「童曲」と教育的意図にもとづく「歌曲」によって構成されている箏の教則本である。

「童曲」とは、①子どものための作品、②箏曲の入門曲、という2点の意味をもって作られた作品のことであり³⁾、箏のためのものの他、長唄のためのものがある。また箏曲の将来を危惧した宮城が次代へつなぐ思いから作られたと考えられている⁴⁾。「童曲」は、明治時代に鈴木鼓村（1875-1931）が子どものための自作の箏曲に名付けたことばであるが、その後この「童曲」という名を受け継いで非常に多数の作品を作曲したのが、宮城道雄（1894-1956）であった⁵⁾。

宮城は亡くなる年まで40年間にわたって、117曲の「童曲」の作曲を続けているが、その大半を占める詩が葛原しげる⁶⁾（1886-1961）のものであり、彼の詩に合った表現法を工夫して作曲している。

教育的意図にもとづく「歌曲」とは、当時「小曲」とか「歌謡曲」といわれた、箏を伴奏にした歌曲のことである。『宮城道雄小曲集』に収められ、技能習得を目的に段階的に配置されている歌曲については、現在では「教育的意図にもとづく「歌曲」」⁷⁾（以下、「歌曲」）とされている。これらは、歌詞が和歌からできており、地歌本来の弾き歌いが習得できるようになっている。

宮城の教則本である『宮城道雄小曲集』は、「童曲」と「歌曲」を、音域や調子に配慮し、奏法や歌に関する新しい技法を段階的に配置してある。宮城は伝統的な教授法から体系的・合理的な教則本を生み出

し⁸⁾、新しい日本の音楽を目指した人物であるが、古典の歌い方や形式をこの小曲集の中にも再現している。そういった意味では、技能習得だけでなく、古典曲を味わう力も養うことができるものである。このような理由から、小曲集にある「童曲」及び「歌曲」を教材として用いることは、器楽としての箏の学習と同時に歌の学習を可能にし、それによって、これまでよりも一歩踏み込んだ伝統音楽の学習ができると考える。

「童曲」について渡辺（2007）⁹⁾は、歴史的な視点として意味があるだけでなく、これからの日本音楽や音楽教育という視点においても重要な意味を果たしている作品であると述べている。また、山田ほか（2003）¹⁰⁾では、「童曲」に見られる教育的な配慮や教育的意義が論じられており、大きな示唆を得ることができた。しかし、授業実践での具体的な効果は未だ検証されていない。

そこで本研究では、『宮城道雄小曲集』の「童曲」と「歌曲」の両方を扱った筆者の授業実践をもとに、伝統音楽の新たな指導法の効果と、宮城の「童曲」と「歌曲」のもつ教育的意義を検証することを目的とする。

II 授業実践の概要

・題材名 「オリジナル箏曲を創作しよう」（Ⅰ－Ⅲ期 全35時間） 平成18年度実施

Ⅰ期 「歌いながら箏を演奏しよう」（13時間）

Ⅱ期 「ふるさと福山をイメージしたオリジナル箏曲を創作しよう」（13時間）

Ⅲ期 「百人一首を歌おう」（9時間）

・生徒 福山市立A中学校 第2学年（20名） 選択教科「音楽」

・教材（Ⅰ－Ⅲ期）

〈童曲〉

「ロバサン」	葛原しげる 作詩	宮城道雄 作曲
「テンテマリ」	葛原しげる 作詩	宮城道雄 作曲
「お宮とお寺」	葛原しげる 作詩	宮城道雄 作曲
「雪のペンキ屋」	葛原しげる 作詩	宮城道雄 作曲

〈教育的意図にもとづく歌曲〉

「吉野山」	作詞者不祥	宮城道雄 作曲
「春霞」	藤原興風（古今和歌集）作詞	宮城道雄 作曲
「大井川」	小澤蘆庵 作詞	宮城道雄 作曲

〈鑑賞曲〉

「秋の曲」	吉沢検校 作曲	松坂春栄 補作	（古今調子）
	（箏：宮城喜代子	箏・歌：宮城数江）	

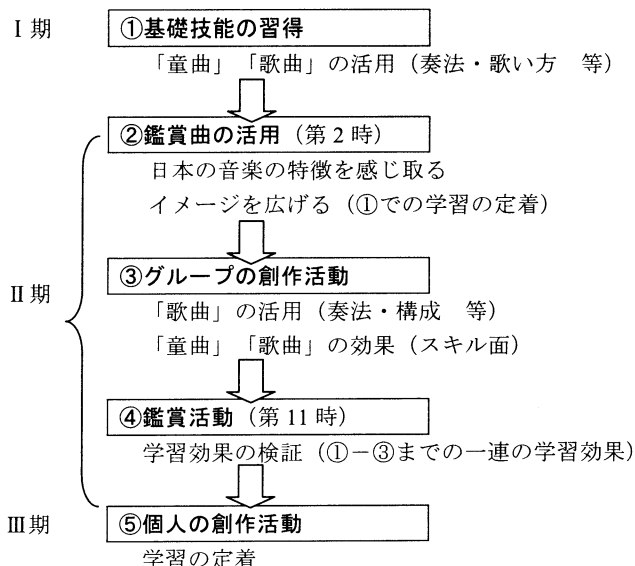
〈調子の学習〉

「金剛石」	楯山検校 作曲	（楽調子）
「春の宴」	三上澄恵 作曲	（乃木調子）

〈発声練習曲〉

「発声と節付け」	松坂尚子	『おことであそぼ』NO.1より	(1) - (5)
----------	------	-----------------	-----------

・学習過程



活動内容は、1. 箏の基本的な奏法を身に付け、日本の音楽のよさ（和の心）を感じること、2. 箏を演奏しながら歌を歌うこと、3. イメージを広げるために、楽曲を鑑賞すること、4. イメージを歌や音で表現すること、といった多様なものである。日頃経験の少なかった創作活動を中心に、歌うことにも焦点をあてて指導計画をたてたが、その中でも鑑賞する場面を創作活動の前後に仕組んだことは、非常に効果的だった¹¹⁾。全体の活動を通しては、日本の音楽のよさの中でも「余韻」「間」「静寂」を常に意識させて指導にあたった。

なお以下では、「童曲」「歌曲」を扱ったI期とII期を分析する。

1 基礎技能の習得

1-① 「童曲」の活用

I期の段階で、基礎的な箏の弾き方や歌の歌い方を身に付けるために「童曲」を扱った。これまでは必修授業で「さくら」や「荒城の月」の演奏を体験していたが、歌よりも演奏中心の学習だったので、歌うことの意識はほとんど無い状態であった。そこで、最初に歌の旋律と箏のふしが同じであり、押し手や合わせ爪の奏法が学べる作品を選んだ。

最初に取り組んだ「ロバサン」は、十の絃から始まりすべて親指で絃を順番に演奏する曲で、最後の音（第8小節の1拍目）だけが九から七に跳ぶ曲である。技術的には「さくら」や「荒城の月」よりずっとやさしく、初見でも十分弾ける生徒がほとんどである。しかし、声をおなかからしっかり出しながら弾くというのは、生徒にとっては予想以上に難しいものであった。次の曲からは左手の奏法を学んでいく。「お宮とお寺」では強押しと弱押しの両方があり、自分で音程をコントロールしなければならない。歌うことよりも弾くことだけで精一杯という状態であったが、簡単な「童曲」では、歌いながら箏を弾くという活動を体験させたかったので、あえて同時に練習させた。

発声については、地声でよいのでまっすぐ声をとばし、おなかから響かせる、という発声を意識させた。まわりの人と声を合わせ、美しく響かせることを心がけて取り組んでいた合唱の授業とは違い、「自分のもって生まれた声を大切に」という意識で歌う学習は初めてである。『宮城道雄小曲集』には、発声についての練習曲はないので、これについては松坂尚子の『おことであそぼ』NO.1の「発声と節付け」に記載されている曲¹²⁾を活用した。

一斉指導における初めの「童曲」4曲については、歌いながら演奏する練習を行った。技術的には、強

押し・弱押し・掻き爪・合わせ爪がでてくる曲である。

1-② 「歌曲」の活用

次の段階からは、歌と手の組み合わせに違う特徴があり、段階的に学習することができる「吉野山」「春霞」「大井川」の3つの「歌曲」を扱った。「吉野山」は歌の旋律と箏のふしが同じであり短い後弾きがある。「春霞」は、箏が歌の伴奏になっており、歌にふし回しの部分があり、これも短い後弾きがある。「大井川」は前歌、合の手、後歌の3つの部分から構成されている曲である。Ⅰ期の段階では、基礎を身に付けさせるため覚え込むほどに何度も練習をさせていったが、実はこの「歌曲」の構成がⅡ期で取り組む創作活動の大きな手助けとなっていた。

学習にあたっては、Ⅱ期を意識し和歌のイメージを大切にするために、歌詞の朗読や歌だけの練習を取り入れた。「春霞」や「大井川」の演奏は「童曲」で扱った曲に比べると、かなり難易度が高くなっている。歌いながら演奏する基礎技能学習は、初歩段階の取り組みであったが決して簡単ではなかった。これまでに生徒たちが練習してきた奏法は、合わせ爪・掻き爪・割り爪・かけ爪・すくい爪・すり爪・強押し・弱押し・後押し・最強押し・裏連・輪連・流し爪・引き連・引き色などである。

「歌曲」での取り組みで筆者の予想と違ったことは、十分弾けるようになってから歌を付けていくよりも、最初に歌の練習をして全体の感じをつかんでいた方が、歌いながら演奏することをより習得しやすかったということである。部分から全体ではなく、全体から部分へという学び方であった。

2 鑑賞曲の活用

Ⅰ期の学習では奏法や歌い方、曲の構成の他、「余韻」「間」「静寂」といった日本の音楽の特徴を学んでいたため、これらのことを意識させながら創作活動前に1回目の鑑賞（Ⅱ期の第2時）を行った。このときは、音色の美しさや奏法、歌い方をどのように感じ取っているかということに視点を置いた。鑑賞曲は、箏曲の名曲である「秋の曲」である。吉沢検校の作った「古今組」¹³⁾の中の1曲で、秋らしい気分を導く前弾きに始まり、前歌は初秋、中秋、2首ずつの4首、後歌は晩秋の2首である¹⁴⁾。このときの鑑賞で感じ取ったことを整理して次の創作活動に入ったが、歌い方に対するインパクトが強く、声をしっかり出して表現することが大切だと気づく生徒が多かった。

3 グループでの創作活動

創作活動は、各グループで完成させた和歌に曲を創作していくものだが、ここでⅠ期で学習した「歌曲」のタイプを思い出させ、自分たちはどのような曲のタイプ（構成）にしていくかを意識させた。創作の仕方については、最初はアドバイスをしながらある程度自由に取り組みさせたので、旋律と伴奏といった西洋音楽的発想で取り組むグループや、言葉のイントネーションから音を探るグループ、また、和歌のイメージにあった奏法から取り組むグループなど様々であった。創作が進むにつれ他のグループとの交流が、曲を練り直す際に非常に効果的だった。

創作活動においては、ねらいを焦点化することやグループ活動での相互援助活動を効果的に仕組むといった、指導過程の工夫を図ることが大切であった。

4 鑑賞活動

中間発表後の第11時の鑑賞では、同じ「秋の曲」をもう一度鑑賞させたが、これまでのすべての学習がどのように定着し学習効果があったのか、ということを検証できるものとなった。

Ⅲ 考察

ここでは、『宮城道雄小曲集』の「童曲」や「歌曲」の学習効果が特に見られた、Ⅱ期の授業の③グループでの創作活動と④鑑賞活動を取り上げる。なお、本文中の「童曲」と「歌曲」のスキル面の効果には_____線を、鑑賞文中においては、認知面に_____, 情意面に_____を引いた。

3-① 生徒の作品に見られる「童曲」の効果

生徒の技能的な成長についていえることは、前半の頃は1か月たっても、押し手がでてくるとあわてて弾けなかったり、声も出ない状態でなかなか進歩がみられなかったが、Ⅰ期を経てⅡ期になる頃から徐々に箏の扱いが自由にできるようになり、次の創作段階では加速度的に演奏技能を身に付けていったということである。その点において、「童曲」から始める段階的な基礎技能学習は非常に効果的だったと考える。生徒の創作作品においては、基礎段階で学習した合わせ爪が随所に見られる。3班の作品「明王院」¹⁵⁾の出だしは、情景のイメージと合わせて効果的に合わせ爪の伴奏を創作している。

3-② 生徒の作品の中に見られる「歌曲」の効果

例)「芦田川歴史たどりて吹く風の 眠る町こそ草戸千軒」 (2班作品:草戸千軒¹⁶⁾)

この生徒作品の和歌にある芦田川は地元福山を流れる川であるが、中世から江戸時代にかけて何度も洪水に見舞われ、川の底に町が沈んでしまったという歴史をもつ。2班の作品は、その昔町が活気にあふれ人々がにぎわっていた様子を再現し、再び現代の静かな川景色に戻ってくるという情景を創作している。

この曲は第一箏と第二箏で演奏されるが、第一箏はほとんど歌詞の旋律をたどるという「吉野山」のスタイルで創作され、全体としては「大井川」のスタイルで合の手が入り、第二箏が伴奏になっている。最初の2小節は「春霞」の出だしの応用が見られ、第3、4小節は第二箏が1オクターブ上でメロディーを半拍ずらして演奏している。このずらしは既習曲には見られないもので、独自の感覚で創作されている。前弾き最後の部分は、「大井川」の前弾き最後に使われている合わせ爪・輪連の伴奏の形をとっていることがわかる。

2班がこだわったのが、合の手の前のすくい爪の速度を変えることで、人々がにぎわっている中世の平和な町へさかのぼることと、合の手の最後にすり爪を使い再び現代へ戻るといった時間的変化を表すことだった。中間の合の手に当たる部分は楽譜には書かれていないが、テーマと伴奏で10小節演奏される。このテーマは前弾きのメロディーであるが、ここでは速いテンポで力強くはっきりと演奏され、活気あふれる草戸千軒町のイメージを表現している。

第10小節の4拍目の最後に引き色を使い余韻を下げているが、後押しなども試みた結果、引き色の方が次に続くすり爪(再び現代へもどる)の効果を一層引き立てるものとなったので、引き色の方を採用した。ここで分かることは、イメージに合った音色の効果を感じ取っているということである。既習曲の部分をそのままとってきて使うのではなく、ああでもないこうでもないという試行錯誤しながら、それまでの知識と体験を総動員して音を探しだしている。練り直しの段階で、このグループの生徒の自己評価に、次のようなものがあつた。

前後の「間」で表現できたけれど、そのあとの入りがバラバラだった。「間」も大切だけど、その次のことも考えたい。また、合の手のテンポがずれていたのを気をつける。できないところをカバーし合いたい。

- ・「静寂」で時間を表現する。
- ・合の手で草戸千軒の町のにぎわいを表し、前後の間で時間の流れ(空間)を表現する。

* は筆者による

「静寂」という表現要素は、特にこのグループが意識して取り入れており、日本の伝統音楽の特徴を感じ取って表現しようとしたものだとはいえる。

IV 鑑賞文の中に見られる学習の効果

ここでは、草戸千軒の曲を創作したグループの特定の生徒の鑑賞文を取り上げ、その認識の深まりを追っていく。

(第2時)

歌い方では、^①腹から声が出ていて、自分の声なので、作り出した声ではないので何となく親しみやすい声だと思った。こういう発声法は、普通の時にあまり使わないので懐かしい感じがする。箏と歌が違う意味で弾かれているのではなく、詩と同じイメージで、そのときの情景が分かるような、^②音があるところがイメージをふくらませやすい。
^③2つの箏が混じり合って1つの音色のようになっている。お互いに聞きあって、一方がどちらかを殺してしまうことがなく、2つの箏の音が絡み合って1つの音色を作り出している。手事でも、秋の詩を表現しているところからイメージが大きくなる。

* は筆者による

この鑑賞文は、「童曲」「歌曲」の基礎技能学習後に鑑賞したものであるが、^①発声法、^②奏法とイメージに合った表現方法、^③音色の聴き分け、について書かれている。^①については、西洋音楽の発声と地歌箏曲の発声の違いを聴き取り、「親しみやすい声」「懐かしい感じがする」と表現し、その発声に肯定的である。これはI期での「童曲」「歌曲」の歌唱体験が生かされた聴き取りである。宮城数江の張りのある歌声に新鮮な感動を覚えた面もあったと思われるが、その他のほとんどの生徒も^①についての感想を最初に書いていた。

創作活動に入り、中間発表後第11時に同じ曲を聴いた鑑賞文は次のとおりである。

(第11時)

すり爪のところが、自分たちのやっていたのに比べてとてもおちつきがあると思いました。音が柔らかくて、行って帰るあいだに間があったのでそこで落ち着きを感じることができました。自分たちももう少し柔らかくゆっくりやって、お互いに合わせていきたいです。最初の方は箏の音も少なかったけれど、1つ1つの音がちゃんとしていて、少ない音でも強弱があるのが良かったです。後ろになっていくうちに音が多くなって、秋になっていく華やかさがイメージできました。手事では、手事の中に何曲もあるようで、その中で速度が変化していました。ゆっくりになって速くなってまたゆっくりになっていくところでは、その途中に少しの間があったので、速くなくても焦らないで落ち着きました。自分たちは間や静寂をととても大切にしていきたいので、お互いに目を見合っただけでいいようにしたいと思います。

* は筆者による

第11時の鑑賞では、音色や奏法、強弱や速度の変化を細かく聴けるようになっており、自分たちがどのように演奏したいかという主体的な気持ちが書かれている。噪音については、「すり爪」を認識し、自分たちの作品の音と比べ「音の柔らかさ」や一瞬止まる「間」を感じ取っている。また、音から感じ取ったイメージを「秋になっていく華やかさ」と具体的に書いている。「秋の曲」は16分39秒あり、すべてを聴き終わったところで鑑賞文を書いているのだが、手事の構成を詳しく学習したわけではないのに、曲の中での手事の部分をとらえ、その「速度の変化」について触れている。これは「歌曲」で学習した「大井川」の構成を使って創作したことで、全体の聴き取りができ、手事の変化するまで細かく聴けたのではないかと考える。

以上の分析は、特定の生徒の学習での変化であるが、第2時と第11時における残りの生徒の鑑賞文をまとめると次のようになった。

(第2時)

〈歌い方に関する気づき〉
<ul style="list-style-type: none">・声の特徴や歌い方は、自分の声をそのまま題している感じで歌い方も、<u>1つの言葉でも2つの音で表現したりして特徴的だと思います。</u>・箏の弾き方では、歌のときはそこまではげしくは音を出さずに歌の声を主に使って音を作っていると思います。・歌を歌っているほうの声が大きいただけではなくて、響かすような箏の音程にとても近い歌声だと思いました。・<u>すごくおなかで支えているような感じがする。</u>・はじめの短歌を歌うとき、<u>一言一言をのぼして、その一言にも強弱をつけたり音程を変えたりなどすごい</u>と思った。・歌声がとても腹の中から声を出しているようで、美しく響いていた。・<u>1つの言葉をすごく時間を掛けているため、すごくゆっくりな曲である。</u>・<u>ゆっくり歌っているけど声ののびがすごく響いていて箏の音とあっているのですごい</u>と思いました。・<u>1つ1つの言葉に力や気持ちを込めて歌っている。</u>・「月見れば」のところで、「月見れ」でとまって「ば」が強くなるぼしている。
〈奏法に関する気づき〉
<ul style="list-style-type: none">・1つ目の歌で<u>風を表すのに輪連</u>が入っていた。・<u>すくい爪</u>では、とくに<u>秋のさびしき</u>を感じた。・<u>すくい爪</u>で、かれはのちるような様子がつたわった。・<u>すくい爪</u>や押し手の音の変化があった。・<u>すくい爪</u>のような感じの音がきけた。あと<u>引き色</u>のような音もあった。・はじめの「稲葉そよぎて」のところで<u>輪連</u>が何回も使われていました。(←実際は輪連でなくすり爪か裏連と思われる)・巾の音を1と2の爪で連続に「カタカタカタ」とやり、そのまま一まで行くのがよかった。(←裏連のこと?)・かき手も分かりました。
〈表現要素や速度変化、構成に関する気づき〉
<ul style="list-style-type: none">・<u>どンドンテンポが速くなっている</u>ことに気づいた。・<u>手事</u>に入って少しした後からは速くなっていった。・<u>2人でちがうリズムや音を弾いていたのですごい。</u>・<u>2人が交代</u>にひいているのがとても楽しく聞くことができた。・曲の構成としては<u>大井川と同じ</u>だと思いました。
〈イメージに関する気づき・その他〉
<ul style="list-style-type: none">・手事のシャラランの所は、<u>もみじやいちょうの葉がひらひらと落ちてくるような感じ</u>で表されている。・<u>ふつうに読んでも感じたり思い浮かべる事が出来ない情景などが頭に浮かんできたので、すごい</u>と思った。・<u>だんだんリズムやテンポが速くなっていき、冬が近づいてきて風が強くなってきているんじゃないか</u>と感じた。・箏の演奏がとても速いです。<u>自分もあんなふう</u>に弾いてみたいです。

(第11時)

〈歌い方に関する気づき〉
<ul style="list-style-type: none">・歌い方では「しい」など1つの言葉に<u>上がり下がりをつけて</u>歌っていました。・歌い方は、<u>日本音楽独特の地声</u>をまっすぐに響かせるような歌い方をしていました。・前歌は<u>ゆっくりで伴奏</u>があまり無くて、歌が大事なのかと思いました。・<u>声の強弱や高低</u>で曲を表現していると思いました。・私たちの班では歌を重視しているので、この歌い方を見習って、<u>地声</u>がしっかりと響く歌い方ができるようになりたいです。

- ・ 僕たちは歌の声を大きく、箏は余韻を充実させたいです。
- ・ 歌っている人はとても大きな声で歌っていたのでぼくもしっかり声を出していきたいと思いました。

〈奏法に関する気づき〉

- ・ 奏法では句の情景にあったすり爪や輪連、流し爪を使っていてとても音色がきれいだった。
- ・ 最初の「稲葉そよぎて」のところではすり爪が使われてあって風をあらわしていると感じました。
- ・ 盛り上がって行くところは割り爪などを多く使っていたし、終わりごろになると余韻があったと思います。
- ・ 前弾きは合わせ爪から始まり、余韻を大切にしていたと思います。
- ・ 後歌に切り変えるときは、輪連を使って工夫しており出だしがはっきりしていました。
- ・ 最後は合わせ爪できまり、余韻が響いた。

〈表現要素や速度変化、構成に関する気づき〉

- ・ 静かな初秋の雰囲気がテンポや間で感じる事ができた。
- ・ 合の手ではだんだん速度が速くなっていった。
- ・ 速度が速くなったり遅くなったりして、情景の移り変わりをあらわしているのではないかと思います。
- ・ 速度をつけて遅くなったり速くなったりして、速くなるところでは2人が弾いているパートが重なり合って1つのメロディーになっていた。
- ・ 中秋のところあたりから少しずつ速くなっていったのが聴き取れた。
- ・ 間をうまく使って表現していた。
- ・ この曲は大井川タイプのものだと感じた。
- ・ 手事のところでは中秋から引き継いで、ゆっくりだったのがだんだん速くなって行って、日本の音楽の特徴の1つを感じることができました。
- ・ 手事ではだんだんと速くなって行って、中秋からだんだんと風が冷たくなって行って、落ち葉がひらひらと舞っているようでした。
- ・ 今まで取り入れなかった「静寂」なども取り入れ、より曲を進化させたいです。

〈イメージに関する気づき・その他〉

- ・ 僕は今の曲にまた速度をつけて、もっと情景を伝えていけるようにしたいです。
- ・ 自分たちの作品にも合の手が入っているので、合の手に入る前や後の速度に気をつけながら、1つ1つの奏法をしつかりやって音を響かせていきたいと思います。
- ・ 今度弾くときはただ強く弾くのではなくて、やさしく弾くことも大切だと思いました。

第2時でも歌い方や速度変化、構成の気づきなどが認識されたのは、基礎基本の習得を図ったI期の学習の成果と見ることができる。さらに、第11時の鑑賞文では奏法の正確な聴き取りや〈表現要素や速度変化、構成に関する気づき〉の記述が増え、イメージとより関連した形で細かく聴けていたことが分かる。③-1の生徒の作品と③-2の生徒の作品に見られスキル面の効果だけでなく、鑑賞活動に見られたように、認知面と情意面にも顕著な効果があることがわかった。

以上のことから、指導過程の工夫による効果、ならびに宮城の「童曲」と「歌曲」の教材の有用性が検証されたと言える。

V おわりに

生徒たちは基本的な箏の技能を身に付け、グループでの創作活動を経て、そこからの学習を生かした鑑賞活動を行った。経験から得られた知識が、認識されるだけにとどまらず、自分の実感した言葉となって表現された。すなわち、『宮城道雄小曲集』を効果的に用いることによって、最終的には本格的な地歌箏曲を味わう力まで養うことができた。

今回の歌を伴った「童曲」から出発した箏の学習は、器楽領域と創作領域の学習だけではなく、伝統音楽の特色を学習するまでに至った。そこからいえることは、指導過程の工夫と効果的な教材選択により、これまでの伝統音楽の授業よりもさらに踏み込んだ授業展開が可能になるということである。

【註および引用文献】

- 1) 福山市の箏の生産は、全国の70%を占める。また福山市鞆町は宮城道雄の父の故郷であり、先祖代々の地であった。
- 2) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成15年12月）一部改正』独立行政法人国立印刷局，2004，pp.60，62。
- 3) 渡辺亜希子「宮城道雄の「童曲」－作品分析とその教育的意義について－」『音楽教育史学会』第10号，2007，p.113。
- 4) 長谷川慎，安藤珠希「童曲再考－その教育的意義を考える－箏曲と長唄の童曲を題材として－まとめにかえて」『日本音楽教育学会』33号，2003，p.77。
- 5) 藤波ゆかり「童曲再考－その教育的意義を考える－箏曲と長唄の童曲を題材として－3.宮城道雄の童曲に見られる教育的な配慮について」『日本音楽教育学会』33号，2003，p.73。
- 6) 福山市神辺町出身。福山市の名誉市民であり，地元の多くの学校の校歌を作詞している。本校学区の小学校も葛原しげるが校歌を作詞しているので，生徒になじみがある。神辺町では毎年葛原を偲ぶ音楽祭「ニコピン祭」が開催されている。
- 7) 千葉潤之介，千葉優子『宮城道雄音楽作品目録』財団法人宮城道雄記念館，1999。
- 8) 吉川英史「歴史に見た宮城道雄」『季刊邦楽』創刊号，1974，p.36。
- 9) 前掲書3)，p.122。
- 10) 前掲書4)，5)，pp.72-82。
- 11) 大森由紀「幅広い音楽活動を仕組んで生徒の感性を引き出す」『教育音楽 中学・高校版』8月号，音楽之友社，2007，pp.36-37。
- 12) 松坂尚子「発声と節付け」『おことであそぼ』NO.1，大日本家庭音楽会，1999，pp.102-103より，(1)－(5)の5曲。
- 13) 幕末に名古屋で活躍した吉沢検校が作曲。「春の曲」「夏の曲」「秋の曲」「冬の曲」「千鳥の曲」の5曲からなる。
- 14) ビクター-伝統文化振興団体『箏曲 宮城喜代子の藝術 古典編2』VZCG-92 解説書より。
- 15) 広島県福山市草戸町芦田川河畔にある真言宗大覚寺派の仏教寺院。中世には草戸千軒町が門前町として栄えていた。本堂と五重塔は国宝に指定されている。
- 16) 広島県福山市にあった鎌倉時代から室町時代にかけておよそ300年間存在した大規模集落。60年代からの約30年間の発掘調査で当時の様子が明らかになった。遺跡からの発掘品は国の重要文化財に指定されている。

【参考文献】

- ・千葉潤之介，千葉優子『音に生きる 宮城道雄 伝』講談社，1992。
- ・千葉潤之介，千葉優子『宮城道雄音楽作品目録』財団法人宮城道雄記念館，1999。
- ・千葉優子「宮城道雄の著作に見る音楽観」『東洋音楽学会』第58号，1992，pp.17-38。
- ・千葉優子「やさしい箏曲の歴史（第28回）道雄先生の教授法」『宮城会会報』171号，1998，pp.24-29。
- ・千葉優子「伝統音楽 宮城道雄が残したもの」『音楽文化の創造』vol.42，音楽文化創造，2006，pp.32-34。
- ・千葉優子『ドレミを選んだ日本人』音楽之友社，2007。

- 吉川英史「歴史にみた宮城道雄」『季刊邦楽』創刊号，邦楽社，1974，pp.33-41。
- 吉川英史『この人なり宮城道雄傳』邦楽社，1979。
- 葛原しげる『童謡教育の理論と実践』隆文館，1933。
- 葛原しげる「童曲漫語」『三曲』第146号，美妙社，1934，pp.15-20。
- 松坂尚子「発声と節付け」『おことであそぼ』NO.1，大日本家庭音楽会，1999，pp.102-103。
- 宮城道雄，葛原しげる『箏曲童謡』大日本家庭音楽会，1931。
- 宮城道雄「箏曲」『家庭科学大系』家庭科学大系刊行会，1930，pp.51-53。
- 宮城道雄「私の童曲及歌謡曲に就て」『三曲』第70号，美妙社，1928，pp.19-20。
- 宮城道雄『箏曲楽譜 宮城道雄小曲集第一集第二集合本』邦楽社，2007。
- 文部科学省『中学校学習指導要領（平成15年12月）一部改正』独立行政法人国立印刷局，2004。
- 文部科学省『中学校学習指導要領（平成20年9月）解説－音楽編－』教育芸術社，2008。
- 大森由紀「幅広い音楽活動を仕組んで生徒の感性を引き出す」『教育音楽中学・高校版』8月号，音楽之友社，2007，pp.36-37。
- ビクター伝統文化振興団体『箏曲 宮城喜代子の藝術 古典編2』VZCG-92 解説書。
- 渡辺亜希子「宮城道雄の「童曲」－作品分析とその教育的意義について－」『音楽教育史学会』第10号，2007，pp.113-125。
- 山田美由紀，長谷川慎，安藤珠希，藤波ゆかり，垣内幸夫，福井昭史，本多佐保美「童曲再考－その教育的意義を考える－箏曲と長唄の童曲を題材として－」『日本音楽教育学会』第33号，2003，pp.72-82。